

## 土木工學界の元老

# 古市公威男の死を悼む

工學博士古市公威男は、一昨年來健康勝れず自宅に於て加療中のところ、心臓性喘息を併發し、一月二十八日早曉三時十分遂に薨去された。享年八十一歳。

男は安政元年七月十二日姫路藩士の息として生れ、明治初年大學南校に學び、明治八年には既に佛國に留學、歸朝後明治十三年來内務、遞信、朝鮮の各土木技師として斯界に偉大なる貢獻をされ、樞密院顧問官、帝國學士院會員、東大名譽教授營繕管財局顧問、宗秩寮審議官として國家に重きを爲し、一方日本工學會理事長、日本動力協會々長を始め幾多の學會協會の會長或は役員として名實共に我國工學界の元老であつた。

葬儀は二月一日午後一時より青山齊場で嚴かに執行されたが參列する朝野の名士數千を算し、巨星の葬送に相應しき盛儀であつた。薨去の報天聽に達するや特旨を以て旭日桐花大授章を加授された。

我等は次に日本工學界の元老としての男の經歷を掲げて哀悼の意を表し、併て生前の功績を偲ぶ事にしたい。

明治十三年歸朝と共に土木局傭を命ぜられ之を官界の振出として同御用係、文部省御用

係(兼)を経て十七年七月内務三等技師に任ぜられ、十九年五月には工科大学教授、工科大学長、帝國大學評議官の兼務を命ぜられ、二十年學位令の制定さるゝや、松本、原口、長谷川、志田、高松、谷口、平井、辰野の九氏と共に帝國大學評議會の推薦によつて最初の

工學博士の學位を得た(五月七日付)。同年には一旦工科大学長を辭したが、翌二十二年十月再び工科大学長、帝國大學評議官を兼命され、同年六月には現在の東京工大の前々身東京工業學校の商議委員となり、一方内務省にあつては土木局長に昇任した。

二十三年九月に貴族院議員に勅撰され、二十四年土木局長としての勅任官に進み、二十七年には内務省土木技監として内務技術の最高位に就き治績大に見

るべきものがあつたが、三十一年七月一旦官を辭した。同年十一月遞信次官として再び官途に入り、其間遞信省通信局長心得、同鐵道局長心得、日本鐵道株式會社會計監督官、同管船局長心得等を兼務、同十二月に鐵道會議々員を被仰付、三十二年二月に工學博士會々長に當選した。

同年二月に鐵道國有調査會委員となつてか



の有名な鐵道國有事業の樞機に參割、同六月鐵道會議々長となり、大に敏腕を振つた。

三十三年五月官制改革により一旦廢官となり同時に遞信省總務長官兼遞信省官房長となり、後鐵道作業局長官心得を兼務、港灣調查會委員となり同年再び本官並に兼官を辭した

三十六年三月に帝國大學名譽教授の名稱を受け、同年三月鐵道作業長官として三度官途に入つたが、同年十二月に三度官途を退き風雲急を告ぐる韓國に命を奉じ、京釜鐵道株式會社總裁となつて日露の大役に重要な役割をつとめ、戦後三十九年六月統監府鐵道管理局長となり、戦後經營の一役を買ひ、同年九月には帝國學士院會員に推薦され、翌四十年六月には四度官を退いた。

爾後は野にあつて専ら公共の事に従ひ四十一年には日本大博覽會の評議員及工事計畫審査委員、四十二年には日英博覽會評議員、四十三年には議院建築準備委員會委員、臨時治水調査會委員、四十四年には當時問題となつてゐた廣軌鐵道改築準備委員會委員、港灣調査委員、大正七年には臨時教育會議委員、帝國學士院第二部長、臨時議院建築局顧問、八

年には度量衡及工業品規格統一調査會委員、道路會議々員、九年には學術研究會議々員、十年には工業品規格統一調査會委員、十一年に鐵道會議々員、十二年に帝都復興院評議會評議員等凡そ工學、工業界に事ある毎に常に其名を列し、此間八年十二月二十七日男爵を特授され、十三年一月に樞密院顧問官となり十四年には震災豫防評議會議員等を仰付けられ今日に及んだ。

此外此永い官界生活の間には中央衛生會臨時委員、第三回及第四回内國勸業博覽會審査員、震災豫防調査方法取調委員、土木學會長臨時博覽會評議員、同事務局評議員、足尾銅山鑛毒事件調査委員、第五回内國博覽會、勸業博覽會評議員及同審査第八部長、高等教育會議々員、博覽會開設臨時調査會委員（三九年）等を仰付けられた。

趣味としては觀世流の謡が相當有名であり家庭は夫人との間に七男三女があつた。

以上我國土木工學界の恩人である男の生涯は又とりも直さず日本の土木界の歴史でもある。今や國家非常の秋に際し男を失ひし事はまことに痛惜に堪へない。（2.10.一記者）

## 工學博士

### 日下部辨二郎氏

工學博士日下部辨二郎氏は、昨年十一月末來萎縮腎にて、東京市赤坂區青山南町五の四五の自宅にて療養中であつたが去る一月二十二日午後十時遂に永眠された。享年七十四歳であつた。葬儀は一月二十六日青山の齋場で舉行され多數名士の參列があつた。

博士は書道の大家故巖谷一六居士の次男として滋賀縣甲賀郡水口村に生れ、書家日

下部鳴鶴氏の養嗣子となられた人で、先年物故された、お伽噺の巖谷小波氏の令兄である。

博士は明治十三年に東大土木科を卒業されて内務省土木局に入り、幾多の土木事業に關係され、明治三十三年外遊、歸朝後東京市土木局技師長となり、辭職後は實業界に入つて大正砂利會社取締役、東京鐵筋コンクリート會社々長、東京工學院々長になられたが、數年前からは自適の生活をおくられてゐた。

博士は實に我國土木工學界の一方の權威者であり、その長逝は各方面から惜しまれてゐる。（1—30.一記者）